きずな

目次

October 2022 No.40

巻頭言

同窓会はなぜ存在しているのか　高橋 伸治　4
会長就任にあたり　安光 利文　5

特集1

金融リテラシー教育について　伊藤 宏一　6

特集2

学長プロジェクト3　安全・安心な都市・地域づくり
「国府台コンソーシアムにおける防災の取り組み」について　吉竹 弘行　13

授業紹介

国際教養学部のグループワークの取り組み　常見 陽平　20

学生活動紹介

体育会硬式野球部の活動　三品 俊太朗　21
文化団体軽音楽研究部の活動　江畑 瑞貴　22
CUCエシカル学生クラブの活動　加藤 綾恵　23

CUCレポート

■ニュース・イベント　24
簿記チャンピオン大会　瑞穂会が団体優勝／ほか
■学生開発商品のご紹介　28
■国際センターニュース　29
CUCの国際人育成プログラム　アジアの発展を中核で支える人材を育てるために　橋本 隆子
■キャリア支援センターニュース　33
学生は〝就活〟で成長する　川瀬 功
■地域連携推進センターニュース　37
CUCキッズ大学2022サマースクールの開催／ほか
■The University DINING レポート　40
ブルーベリープロモーションイベント／「とろ〜りUDぷりん」販売／ほか

C O N T E N T S

■ライブラリーニュース
第7回書評コンテスト課題図書展示／ほか　42

■SONEから読者の皆さまへ
快適な教室へDIY「InSONEtion」を開催しました　水出 翔　44

■体育会所属各部等の活動近況　46

教育後援会活動
教育後援会活動報告　48

活躍する卒業生
賃貸住宅業界のリーディングカンパニーを目指して　匝瑳 繁夫　53
『立山黒部アルペンルート』誕生の舞台裏　見角 要　56

同窓会活動
■本部からの報告　広報・IT委員会　60
■支部からの報告　60
■OBからの報告　65
同窓生のお宿・お店紹介「独鈷（どっこ）そば大戸」　大戸 康正　66

CUC経営者会議
CUC経営者会議ニュース
2022年度総会を開催／CUC経営者会議オリジナルジャンパーを製作／CUCアントレプレナーシップ事業への協力／ほか　67

随筆
再び商大生に　泉川 洋二　74
コロナ禍の行動変容をソーシャル・キャピタルは促進させたのか　戸川 和成　75

著書紹介
「持続可能な建物価格戦略　従来の価格設定を覆す会計の視点」
著者：土屋 清人　土屋 清人　78

▼第52期同窓会維持会費等納入者一覧　79　▼同窓会支部事務局一覧　80　▼編集後記　82

■巻頭言

同窓会はなぜ存在しているのか

髙橋 伸治 ● 千葉商科大学同窓会長（昭52 商）

3年目に入った新型コロナウイルス感染症パンデミックの影響がさまざまな分野に影響を与えています。その中で、最大のものは労働環境の変化だと思います。今までの日本は、根性論的な働き方が一般的でした。少しぐらい熱があっても職場に行くのは当たり前。家族が心配でも、それは個人的な理由として考慮しない。しかし、新型コロナウイルス感染症で熱があったら職場に来ないでくださいに変化しました。リモートワークの推進は働くという概念を大きく変えています。今では「無理しないで有意義に働く」が考え方の中心になっています。新型コロナ禍が日本の社会構造の弱さを浮き彫りにしてしまった。

また、少子化時代に突入した日本の人口は1億人を割ることは確実と言われております。戦後復興から日本が求め続けた低賃金で働く労働者。地方の出稼ぎ労働者、女性、高齢者、外国人労働者はもう今までの考え方では集めることもできません。日本全体の経済的な魅力は残念ながら、薄れていると思います。いつの間にか、先進国の中で労働者の賃金は最低水準になってしまいました。これからの企業経営では継続的な賃金上昇を計画に盛り込む必要に迫られています。貧しくなった日本で大きな目標を設定することが大切だと考えています。

私たち同窓会の理念は、「会員相互の交流と親睦を図り、組織および会員の発展・充実並びに建学の精神に則った千葉商科大学の発展に寄与すること」であります。時代の変化に対して、「私たち同窓会は何を求めるべきか」が問われています。この問題を突き詰めていくと「同窓会はなぜ存在しているのか」に突き当たります。私たち同窓会の大義は何なのか、同窓生の皆さまと新たな時代を迎えるために考えたいと思います。

千葉商科大学も新たな改革の時を迎えています。時代にマッチした大学、社会が必要とする大学に向けて、大きな一歩を踏み出そうとしています。私たち同窓会、大学当局、大学の先生たちとの心の距離を短くするための努力が求められています。そのための縦、横、斜めのコミュニケーションが必要です。三者の距離が短くなった時にはじめて、最高の学園環境ができると確信しています。

もう一度、言います。「同窓会はなぜ存在しているのか」。

賃貸住宅業界のリーディングカンパニーを目指して

匝瑳 繁夫（旧姓上東野）
大和リビング株式会社　代表取締役社長
昭和60年 商経学部経営学科卒業

今回、同窓会情報誌『きずな』への寄稿というお話をいただき、今まで母校に対して何も尽力できていなかった身としては、誠に有難い機会だと思っております。

私は昭和56年に県内の高校を卒業し、千葉商科大学に入学しました。思い起こせば、チャールズ皇太子・ダイアナ妃の婚礼やローマ法王初来日など、国内より海外ニュースが印象に残った年でした。

在学した4年間、アルバイトや友人との趣味に勤しむ中、卒業後は不動産・建設関係の業界に進むことを志し、大学3年時に宅建士（宅地建物取引士）の資格を取得しました。社会に出てから役立つ資格を取りたいという思いが強かったのだと思います。

昭和60年、無事に本学を卒業し、大和ハウス工業株式会社に入社しました。その年は、日航機墜落事故や阪神タイガース21年ぶりの優勝など、さまざまなニュースの中、株価は10月時点で約1万3000円とバブル直前期

でした。

入社して配属になったのは、賃貸住宅（アパート・マンション）の建設を請け負う部門でした。土地を所有されている地主様や企業様などに提案して賃貸住宅を建築するわけですが、施工費は安くても数千万円、時には数億円、それ以上という場合もあり、簡単に受注できるわけではありません。まだ飛び込み営業といわれる足で稼ぐ営業の時代でしたので、とにかく顔を覚えていただくために訪問を重ね、最初はどこかの「建築屋さん」、それから「大和（ダイワ）さん」と呼んでいただけるようになり、遂にお客さまから名前で呼ばれた時の感動は今も忘れません。

さらに建築全般の知識はもちろんのこと、相続・固定資産などの税法や資産活用（ＦＰ／ファイナンシャル・プランナー）についても懸命に勉強し、理解を深めました。在学中に宅建士の資格を取得しておいたことで、身につけた業務知識も早い段階から実践で役立てられたため、営業成績はよかった方だと思います。

そして、41歳で長崎支店長、46歳で新潟支店長を経て、50歳で現在の大和リビング株式会社の取締役に就任しました。建築する側から建物を管理する側への業種転換です。

私は決意を新たにし、『お客さま第一主義は当然ながら、何よりお客さまに好かれるよう努力すること』『必要とされているか、絶えず検証すること』『業績を上げるためには、積極精神のもとスピード感を持って臨んでいくが、決して社員を犠牲にしないこと』を心掛けてまいりました。

現在、当社は管理戸数62万戸、売上も６１００億円、従業員数３５００名を超える企業となりました。

しかし、私ども賃貸住宅業界は宅建業者数約12万社超であり、未だにマンパワー頼りで、アナログ・紙文化は相変わらずという状況が続き、時代の趨勢（すうせい）から立ち遅れているのも事実です。ＩＴ活用やＡＩを駆使し、ＤＸ戦略に積極的に取り組むことで、会社を、そして業界を変えていきたいと考え、戦略を練る日々です。

また今後のライフワークも含めて「地方創生」を真剣に考えていきたいと思っています。現在の日本は、少子高齢化社会の中で中央（東京や大阪）一極集中の状況が進んでいます。各種報道でも地方の人口減少・限界集落という暗い話題に終始するのは、憂慮すべき事態です。

当社は現在、全国で62万戸強の賃貸住宅を管理していますので、地方都市の物件を活用することで活性化につながらないかと検証しております。

地方都市および行政は、人口減の歯止めと移住・定住人口の呼び込みに取り組んでいますが、簡単に進むとは思えません。そこで当社の管理物件（または新築物件供給）を利用した「お試し居住」を提案します。本格的な移住を決める前に、一ヵ月単位で家具・家電付の物件に住み、その土地の魅力を認識し、情報収集をするという、体験型の目的人口・交流人口の増大を目指します。

この3年間、新型コロナウイルス感染症の影響で誰もが大変ご苦労されたと思いますが、逆にテレワークやワーケーションが少しずつ普及したのも事実です。アクティブシニアや中央での働き方に拘らなくなった若者・就労者に対して、地方行政との連携でさまざまな補助や特典を整備します。当該地への進出企業とコラボレーションをし、子育て環境の充実を図りながら新たな街づくりに携わりたいという構想もあります。

そして「お試し居住」体験者が、最初はふるさと納税から始まり、最終的に二拠点居住や移住を選択されることで、地方創生に寄与できればと考えております。

今後も微力ながら、少しでも社会の中で役立てるよう献身してまいる所存です。

千葉商科大学の後輩の皆さん、そして卒業された皆さま方、今後ご縁があって業務上、その他、社会貢献なども含めて、お付き合いできましたら誠に嬉しく思いますので、どうかよろしくお願いいたします。

最後に、私は歴史関係の読書が好きで、その中の人物の言葉を社員に伝えることがあります。昨年4月の社長就任時に伝えた言葉を紹介します。

「我に才略無く我に奇無し　常に衆言を聴きて宜しきところに従ふ」

（松平春嶽・自戒の言葉）

「重要なのは行動することだ。そして、失敗から学び、手段を検討しなおも粘り強く、信念を抱き続けることだ」

（中岡慎太郎・蓑輪諒『千里の向こう』文藝春秋・２０２２年）

今後も謙虚に皆さまの意見に耳を傾け、経営者としての信念を持って精進したいと思っております。

『立山黒部アルペンルート』誕生の舞台裏

見角 要
立山黒部貫光株式会社　代表取締役社長
昭和53年　商経学部経済学科卒業

私は、昭和49年4月商経学部経済学科に入学いたしました。在学中はゼミナール連合協議会（ゼミ連）に所属し、先輩諸氏と日々卒業アルバムの制作に没頭していたことが、今は大変懐かしく思います。

昭和53年3月卒業後は、故郷に帰り地元富山の交通運輸事業者の「富山地方鉄道㈱」へ入社。同年4月新入社員研修を経てグループ会社である「立山黒部アルペンルート」運営会社のひとつ立山開発鉄道㈱（当社の前身会社）へ出向いたしました。

その後同社は、平成17年10月立山黒部アルペンルートの運営主幹会社である立山黒部貫光㈱と合併（現会社が同社を吸収合併し存続会社となる）、平成25年6月から同社の取締役運輸事業部長、平成29年6月から常務取締役運輸事業部長を経て、令和元年6月同社並びにグループ会社の立山貫光ターミナル㈱代表取締役社長に就任、現在に至っております。

一昨年の春から、新型コロナウイルスによる感染症が拡大し、以後この2年間コロナ禍に埋もれ、全国の観光地と同様、非常に苦しい思いをしておりましたが、本年は徐々に人流復活の兆しが見え始め、観光地を抱えている私共といたしましては大変嬉しい限りです。

そんな中、事業の運営主幹会社の代表として、国内外からお客さまの受け入れ態勢に「安全と安心」を第一に考え、万全を期すため日々奔走しております。

それでは、中部山岳国立公園内で日本を代表する国際山岳観光地『立山黒部アルペンルート』とは、どうしてできたのか、お話しさせていただきたいと思います。

富山県が誇る『立山』は、古くから駿河の富士山、加賀の白山と共に、「日本の三霊山」として、広く敬われてきました。

晴れた日、富山市街地から東に聳える3000m級の雄大な立山連峰の眺めは、富山県民にとって心の拠りどころでもあります。

全国どこを見渡しても、市街地からこれほどの山並みが一望できるところはないと、自負しています。

1971年6月、中部山岳国立公園の立山連峰にトンネルで貫き、長野県信濃大町までの交通路「立山黒部アルペンルート」が完成。昨年全線開業50周年を迎えました。

しかし、その完成に至るまでには、さらにそれを遡ること20年前の1951年、当時国の電気事業再編成によって、全国で9つの電力会社が発足。富山県の黒部川は国の潮流主義によって関西電力に帰属され、大規模な電源開発が行われることとなったのが発端です。

その電源開発は「黒部ダム」建設という世紀の大工事（1956年着工。後に三船敏郎、石原裕次郎出演の映画「黒部の太陽」でも有名）を指し、長野県の信濃大町側から工事が開始されたのでしたが、黒部ダム完成後は、当

然長野県側から観光客が押し寄せることになり、富山県にとっての水の宝が関西圏に帰属され、また観光客までもが素通りされることに大変危惧したのが、当社の創業者佐伯宗義（地元富山県立山町出身衆議院議員）でした。

これには何としても、富山県側から黒部ダムへのアプローチを整備、確保しなければならないと考え、また幼心から抱いていた立山連峰が障壁となって太平洋側と日本海側が断絶していることに疑問を呈していたことから、これを打破すべく、立山連峰にトンネルを掘り、長野県と一貫交通路で結ぶ、一大事業の建設に取り掛かることを決意したのでした。

また一方では、富山県による第一次総合開発計画の一環として、立山一帯の開発計画を目指す目的と相まって、官民一体となり翌１９５２年４月にその先駆的役割として、当社の前身会社である立山開発鉄道株式会社を設立。これが今日ある「立山黒部アルペンルート」建設の原点となった次第です。

地元立山連峰の麓に生まれ、幼いころから立山の開発を夢見ていた創業者は、太平洋側との交通ルート開設を切に願い「国家の樹立は、地方自治発展の上に成り立つ」と、地方創生のための揺るぎない信念のもと、立山連峰の障壁を打ち破る夢を実現するため、同社の乗合バス事業により、立山美女平～室堂～長野県信濃大町までの一貫交通路の建設を目指しました。

しかしながら、立山連峰をバスで越える事業計画は、自然保護等の観点から非常に難しく、当初の交通体系（室堂～信濃大町間）について再考せざるを得なくなり、１９６４年12月、同社創業の理念を継承する新たな交通体系の確立を目指すため、新たな会社を設立し、立山を尊厳とする精神のもと、社名には「物見遊山」する観光地とは違う。つまり太平洋側と日本海側をトンネルで結ぶ、言わば『貫』とは時間を、『光』とは空間を意味し、暗いイメージの日本海側から脱却するという、壮大な夢と希望を込め、社名に『立山黒部貫光株式会社』と名付けたのです。

同社による建設工事は翌１９６５年11月に起工式を執り行い、立山にトンネルを掘るも、破砕帯の出現など幾多の困難に遭遇いたしましたが、これらに打ち勝ち、前身会社による開発計画から実に20年もの歳月を経て、遂に１９７１年６月に完成した姿が、今日国内はもとより

海外からも多くの観光客が訪れる国際山岳観光ルート「立山黒部アルペンルート」です。

本年も、未だに新型コロナウイルスの感染拡大によって、全国の観光地では終息が見通せない大変不安な日々が続いていますが、当社は昨年の開業50周年を経て、本年は次の50年に向け、また新たな第一歩を歩み始めました。

皆さまには、高さ20mにも迫る雪の壁でおなじみの「立山・雪の大谷」、夏には「黒部ダムの観光放水」、秋には「全山紅葉の立山黒部」など、また乗り物では「ケーブルカー」や「全国唯一のトロリーバス」、「全国最長のワンスパンロープウェイ」など、素晴らしい大自然の景観は勿論、色々な乗り物も楽しむことができる、富山県と長野県を結ぶ唯一の交通路、見どころ一杯の『立山黒部アルペンルート』です。

ぜひ先輩並びに後輩諸氏の皆さまのお越しを、心からお待ち申し上げております。

立山黒部アルペンルート
公式ホームページURL　http://www.alpen-route.com

〈外部団体職務歴〉

北陸信越山岳観光索道協会副会長（富山地区部会長）　令和元年6月～現任
（公）富山県バス協会副会長　令和元年7月～現任
（公）とやま観光推進機構副会長　令和元年6月～現任
立山黒部観光宣伝協議会会長　令和元年6月～現任